和漢字名録

元

ホ 2
314
1

和漢字名錄

藤井先生著

全四冊

此書ハ韻書ヨ因て音訓を假名ぶりをし且和歌のてにを助字休字迄かな假ぶ讀曲轉聲稱呼ヨ目通漢音呉音の別叶韻乃評説假名反切諸例を載て附錄類境諸抄ち是非を論ず

京師書屋　景雲堂發行

門加2
雜814
巻1

和漢字名錄序

大凡人之嗜好や性ゝ癖也

苟好有ル之ヲ於人者ハ必ゝ善

良ゝ人也反ル之者謂之不良

ゝ人也嗜ゝ好其可ル擇耶ニ

不ル謹耶南紀人藤井友甫氏

名常枝屋恒好言葉こゝろ
又國川玄碩伝〻奥之参
子の信の魚妍究有年矣
有而獲蓄和漢之説而
美懐之志久深矣人
知之未嘗焉於是乎

以待之林秋田氏秋田氏
于新作焉秋田氏又有
名義叙之和東山白雪
請曰願之一言事之
耳予曰焉美一事業
為是宜大益於人之書也友甫

氏周非好事詰之人乃豈弗爲
之移之哉之序以興
秋田氏云
天明丙午花朝淡海彦根子文學
伏水龍美書于東山皇居

和漢字名録

凡例

一　此書は字名録と題して字といふ部文字なり。名といふ書訓あり。此書は巻ノ一專和訓の假名遣を論じ。下巻ノ二は漢字名を假名遣を論じ。亦是和漢の二字を冠せる故なり

一　凡假名遣は相通反切の法を明めざれば理會し難し。故に先首に反切の法を論じて。初学を曉さしむ

一　和訓乃假名遣は我国の倭全長子。以呂波字考録ふ。

諸書を引用して、粗假名書を論じ、既に世に行はれしとは、先輩は是非を別ち、正誤混雑の失多し。予今諸書の是非を論じ、書訓世に憑據して、假名を正し、眼字よい○□等の圍を設し、或は字は傷よ——と設て記して行れ難きもの、且讀曲折等、和字の和通、和奇の出新助字、体字、仲俗名、約假名ホ等を載るまで、例挙て論ずる所なり

一

呉音漢音の別、諸書に準ずる。新音は集めて、相通の法を設て、諸例に別ちぐるが故よ、二音互ホ通ずるもの多し。假令ば諸所助等のごとき、右の俗名を呉音とし、古は假名を漢音とし、又萬民文面門曩紐尿農若兒儒如等、ばま同だな同ざな同の例ある。清濁の別を設て呉漢を論ずる故なり。予竊ホ諸家乃類書ホ関て、互に校訂し、別ホ部門を立て呉漢二音を論ず

一

假字反切は諸例、類聚の諸抄中より拔萃して、間々見を加て論辨する所なり

一

叶韻の評説を載ること、幼学讀誦の疑惑を解んが為ホ繁を厭ずの。

附録ホ類聚諸抄の是非を論じ、巳上文は閲する

補ひ誤まるを正して、学、初への徒と尊く者なり。

一　論中に大よ非なり。笑ふべし。一笑よ埼玉等の非

言あるも、予好んで先輩を恐云す彩ふべし。是も

先の淫解よ辞書の人と奥、確んが為に止むるおる

ざる所なり。希くは四方の諸君子これを恕せよ。

安永四乙未　十一月中澣

文會齋主人　謹識

和漢字名録凡例終

和漢字名録巻之上

目録

○又者拗直又位之図
○又者拗直又位之解
○又者妙義之解
○和訓倣名遣解
○諸記倣名遣大概之解
○和字出来ル解

和漢字名録巻之上天

紀藩赤尾浦艸醫　藤井孝校述

○五音拗直五位之畧

	喉	牙	歯	舌	舌
	清音	濁音	清音	濁音	清音
開	あ いや うわ	か きや くわ	さ しや すわ	た ちや つわ	な にや ぬわ
開	い いゝ うゐ	き きゝ くゐ	し しゝ すゐ	ち ちゝ つゐ	に にゝ ぬゐ
合	う いゆ う	く きゆ くう	す しゆ すう	つ ちゆ つう	ぬ にゆ ぬう
開	え いえ うゑ	け きえ くゑ	せ しえ すゑ	て ちえ つゑ	ね にえ ぬゑ
開	を いよ うを	こ きよ くを	そ しよ すを	と ちよ つを	の によ ぬを

唇　全清輕　全濁　半清　はひふへほ　ひいふへほ　ふゆむゆよ　へえめえも
唇半濁重　まみむめも　みいむえよ　むるゆるわ　めれるれろ
喉清音　やいゆえよ　いゆえよ　ゆるえれろ　えるれろ
舌清音　らりるれろ　りるれろ　るうれろ　れろれろ
喉清音　わゐうゑを　ゐうゑを　うゑを　ゑを　を

〔五音と示と歌〕

あわやゑざたらな舌よか牙さ蠲音
はまの二ツい唇の拯室

〔悉曇の三内同〕

あかや喉さたらな舌はまわ唇

○五吉拗直又位之解

文れ又吉ふ宮喉　齒　角　牙　徵　舌　羽　唇
土　金　木　火　水　なり。玉篇指南云宮舌唇
中商に開張角舌徵都徵舌拄蠲羽撮口聚云く。拗直とふ。
明了房記云拗吉延音也直吉俱音也とり生づ㋐の字の下
ゐいや㋑の字の下にいなく二行み列て百歛あり。此を拗吉と
も。撰の百歛ともふ。吉ふ。あいうゑを等のごく又位を列て
又十歛あり。此を吉ともふ。又竪の又十歛ともふ。又十字悉曇
家所謂五十字門異の相通反切の法ふ卒梵文悉曇の中より出る事ふ。昔
時吉備云入唐の時悉曇十八章を相伴。後の後搔書の
偏旁と者ふて序字と制て。梵字を易て佛字反切の法と為

弥ふ伝くるひしとく扨ハ字の最初の㋐の字ハ一切の文字言
説の母なり・若阿の字なき則ち一切の文字も言説もなし故なり・
弘法大師字母釈云 阿上声呼べ 刹無也不也非也阿字是
一切法教之中元最初罪ハ之者皆有阿字若離阿字則無一切
言説・故高広字之母又高広字之根本又一切諸法本不生之
義内外諸義皆従此字而出生也已上悉曇之密鈔云謂本不生
者本者之中初之義不生者無也之謂也・先㋐の
字ハ罪ハの根本生息の候義なり・次ふいを發菩の気初め
て・㋐の字自然より解て いの字を生ず・又いの字唇より解て
ろ記いうの字と成る・扨ハ一切の字変ハ候と申ども・扨ハ㋐ハ大極

いうハ陰陽の義にて・ハいうの三字より成ハ・㋐ハ神にて・い
うハ用にハ・ハいうハ物の字より成ハ・ハを神にて・ハを
用にハ・是れ太極ハ万物を生ずる源なれば・天地の用と為て万物と
生ずるに能ども・太極ハ代て天地の用と為て万物を生ずるハ陰陽の
二つにて・然れども太極と離て陰陽なしと・太極の一元氣が動静して
陰陽の二氣と成るなれば・太極と陰陽が二つよりあるべ・されば候よ㋐
の一字生じて字義開合して いう 開ニ陽 合ニ陰 の二字と成り・そなりうハを の二
字と生ずるに太極陰陽の理ハ同じ・然れば あいうの三字ハ成
一に・但㋐ハ太極の理なれば・ハ字の用と為て法身と生ずる
に能ども・これハ代て字の用と為て報身と生ずるハいう

の二音に故よあいうの三字は音読法字能生より称し為るに因はい
二位のいは位の㋐を生じ又三位のうは又位の㋑を生じ又㋐の音を
唱試れば㋐は㋑の変音にして自然と言ふ又㋑の音を唱試れば
ば㋐は㋑の変音にして自然と言ふ餘の九行も
皆これに同じく二位は位を生じ三位は又位を生じ故に竪相
通ずと云ふ扨又㋐の音撥に牙に突出てかさくけこの音を生
ず喉音は土に属して牙音は木に属して諸木土より生ずれば理に
又又行何れも土より生ずるなれば次にさしすせそのさ行は
ちつてとなにぬねのの火はひふへほまみむめもの水を列ぬ然れ
ば右のごとく土木金火水と次第する中に自然と相生相剋の二義

と具ふる故相生は一位を隔て生ぜり喉音の土より牙音の木を隔て
舌音の金を生じ牙音の木より舌音の金を隔て唇音の水を生
じ舌音の金より唇音の火を隔て喉音の土を生じ唇音の水より喉音の土を生じ唇音の水より喉音の土を生じ
隔て牙音の木を生ずる故相剋は後より前に牙して剋せり喉音
の土は唇音の水を剋し唇音の水は舌音の火を剋し舌音の火
は舌音の金を剋し舌音の金は牙音の木を剋し牙音の木は喉
音の土を剋す相生は前より生ずる故相剋は用なれば前より生ずる
扨未だやはりゆえよわぬうゑたの二音をそらりるれろの一音を捷
めるは土は又行の外にて火より生ずるを剋故にやはりゆえよわぬう

ゑたの土らりるれろの火を挿むえ扨やいゆえよわゐうゑたの二
とも候を〻するすい見あいうえを男二位のい和生男二位のう和
生の音えゑ今やいゆえよ一行の音を濁ぐいいやゆ！いゑいよと濁て変
音よ㋑の音を具し又わゐうゑたえ一行の音を濁ぐ変音よ㋒の音と具
して。うわ！うゐ！うゑ！うを！と濁ぐを以て。あいうえをと同く候音とす
る。右の直音又十字よりて法字法音具足する事。扨又ゆ又十字と
撲よ通じて濁ふれば。一位はあかさたなはまやらわえゆ十字と一字
毎よ長濁ぐい求鞍ヨ皆恵㋐の音を具して。㋐の一音よ歸を二位をい
さきちにひみいりぬるを。求鞍よ恵く㋑の音を具して。㋑の一音よ歸
を。三位いうくすつぬふむゆるうを。求鞍よ恵く㋒の音を具して。㋒

の音よ歸を。四位いけけせてねへめえれゑを。求鞍よ恵く㋓の音を
具して。㋓の一音よ歸を。又位いをこうとのほもよろをを。求鞍よ恵
く㋔の音を具して㋔の一音よ歸を。故よ此を撲相同じ云ふ。為れば
あいうえをの一行は能生ゑ毎ゑ。彼の九行は和生ゑ。ゑ細よ
倫ずれば能生は㋐の一字よて。彼の第九字は皆和生ゑ。ゑればあいうえ
をの又字を倒反の例を以て反切をゑに下ゑりをえと反せば江歸り。決
よえうと反せばうよ歸り。決ようえと反せばいよ歸り。次よいあと反せば彼よ
㋐の一字よ歸納るなり。是を以て一行禄師丑字を択して一字掘多多
字歸一と述られゑ。扨又又十字よ附る拗音。右の方の上よいうきち
ちにひみいりぬを撲通よ配を是冥の音ゑ。左の方の上よいうくすつ

ぬふむゆるうと横通よ配を・乾合にの音ゑ・い・う・而生の音は開合平均
るゑ・ゑひ・且い・う・の二音は諸音を生ずる俗の能生ゑ・ゑ・故よ・左右のよ
よ位を・これ・い・所生れ十字は開音ゑて陽るれば陽位よ配し・う・所生れ十
字は合音ゑて陰るれば陰位よ配せり・又やいゆえよ（開音ゑて陽く）わぬうゐれ（合音ゑて陰く）の二音を下の左右よ配するもこれ
のたりて・又器の左は人の右よ寄るれば左右の陰陽を得るあゑ・ゑ・ゑ・式義は天文
窒氣の器等よ准へて解うをべし・又横通の音は横通の音は横通よ配し・堅通の音は堅よ配する・扨次よ左
方の下よ・やいゆえよの文字を堅ゑ配し・右方の下よ・わぬうゐれの文
字を竪ゑ配を・乾わいうえを・能生るれば・并ゐて用ゑ使ひ・所生の・や・
わ・二音能生ゑ代て用を為をり・扨又位の開合を論ずるに・あかさたな
はまやらわの音は開中の開音ゑて正し・き音るれども・能生わ・横通ふ

して・各き一切の能生るゑ故よ拗音ゑ用いるは・けせてねへめえれゐを
ゐ・ゐ・ゐ開合分合ゑり・をこりとのほもよろれをは分開合分合ゑして・右の
二音は開合平均なるゑ故・乾亦拗音ゑ用いれど・第二位の・い・所生の
十音と・第三位の・う・所生の十音とは・開合平均を・亦拗音ゑ用ゐるゑ・
乾第二第三の音を俗ゑ能生ゑ・第二第三を而生ゑ・ゑ・ゑ・これ
ゐ・あいうえをを左右の拗音は即ち・や・わ・の二音ゑ・ゑを・銀ゑ・ゑ・あい
うえをの行ゑて・い・ゑ・う・を能生ゑ・ゑ・ゑ・かきくけこの行ゑて・き・く・け・こ
を能生ゑ・ゑ・能行これ小准ふ・ゑ・ゑ・拗音を・細ぶゑ・先かきくけこの
行ゑて云ひ・二位の・ゐ・の字に下ゑ・ある・やいゆえよ第一の・や・の音を・繼で
きやと成し・又三位の・く・の字ゑ下に・ある・わぬうゐれ第一の・わ・の音

を徒でくわと成る。さ行の二ツハ㋕の字の拗音うして自㋕の音ふ似ゝり。
又㋖の字の拗音ハさえくゑん。ゑを二位の㋑の字に下よりあるやいゆえ
よ其位の㋓を徒ぐさえと成り。こ位の㋑よ下よりあるわゐうゑたゆに
の㋕を徒ぐくゑと成るなり。さ行えくゑの二音ハ㋖ハ似ゝり。位
範の所謂拗音ハ侵音也拗音ハ迎音也と云なり。十行八位の拗音
これよ准ぶべし。又拗音ハ直音の切韻ハ切して拗音を反切とれば所
拗音よ成る。先右㋕の字の拗音さやくわなるとさやくと反せば㋕よ
成り。くわと反せば㋕よ成る。又ナ字よ附る拗音皆うくれめ。ゑを拗
音を以て根本の反音を正を者なり。反切を法ハ下の巻ふ出せり。
又音を示を欲よ「あわや候」とゝい。あいうゑをわゐうゑたやいゆえよ

三音ハ伊れと候と鼻よ通ずる故よ候音と成る。然るに音量多よい。
わゐうゑれの音ハ唇よ係を以て唇音と別つ。「さたらな音」といさ
すせろハ音と舌よ通ずる音。さすせろと清む時ハ濁音〜。ざ
じずぜぞと濁る時ハ。だぢづでどよ混ずる故よ音音と千る。意量多ハ
清濁を論ぜど音音と定む。次よたちつてとハ音と腦よ通じ。らりる
れろハ音を音く音。なにぬねのハ音をうて鼻と腦よ通ずる故よざ
たらなのハ音を音音と成る。「か行牙」といかきくけこハ牙音ふして候ふ
も通ずる。又がぎぐげごハ濁る時ハ純ら候よ係ぶ故よ意量多ハよい
候音と成る。「はまの二ツハ唇の輕重」と云ふ。はひふへほハ唇の輕音也
そ他よ雑〻。まみむめもハ唇の重音ゆて又他よ雑〻。故よ意量

亦舌頭音と唇音と互に通ずる。唇音と牙音の清濁と互に通ずる。
重清濁解に出せり。扨舌音と齒音と通ずるときは喉音唇の三用と云
細に倫ずるときは牙音喉唇の又處と云。又處の名目と云も
又舌頭と稱せり。意異なれば三用と云るとも。舌頭音は又舌と云
又舌と半舌まで音は二音を加へて七音と云事なれども。其原は意異
の二用より出る事にして。意異なれば各別の義なるべし。あらまし云
○又音妙義の解
人物の義は天然の妙理なれば。蛮貊の人語禽獸鳥魚の鳴聲も
人力能く訳とゞし。公治長の如き賢人なり。されば梵漢和言語
と異なれども。又舌頭通に相通じて。天竺も物

言葉を訳し。中華の助語を訳して通じる。先家
に和語と異て又舌を倫ぜんに。かさくけこの一行まで。假令ば行行
行行行るゝ〳〵又行に通ずると。ゆ又の行と云る軍さ詞なれば㋕を
㋕に初又れ通し。下のふの出音とはまた同の例にて。易て行と云ふ
雅語に猶ずる。ゆ又の行を猶ずるゆ。何れの行も皆これに同じ。さ
ちすせその行にて。增增增增增通じ。たちつてとの行にて猶
猶猶猶猶通じ。なにぬねのの行にて去去去去去通じ
はひふへほの行にて拔拔拔拔拔通じ。まみむめもの行にて任
任任任任通じ。やいゆえよの行にて金●金金●用用●
用。絶●絶絶絶悔悔悔●悔●●滯滯滯通じて。何れも

文字を全する詞なり。らりるれろの行ていてとでどなどの通じ。わゐうゑをの行そい遊遊遊

唐音とも。訝玉篇云於礼切應声也とも答ふ。又意よ適ふ事ふい唯小補韻會俞水切説文諾也增句應声也〜答ふ。又自他の人を呼ぶふい請玉篇烏回切呼人也〜嘆ゑ〜。やいよいと呼ぶも請の語〜語〜。又和ゑよ。やよ。やよ時雨。やよ時雨と呼ぶ詞ゑ。又下の詞ふい皆やよれ二語ゑ。又辞。否答ゑ答る詞ゑして皆是。あわやこ物の関の言〜是言語い嘆をかとするの志理ゑ越てあわやの言い能生〜ゑして。ゑふ〜ゑれい。和語ゑ於て以下の假名を用ゑ希ゑ〜ゑ。仏教ゑ。枕又不の字の和訓い吾国ざたなの言ゑ畫て餘言ゑ。ゑ生るゑな。先さ去すせゑうの物ゑてい。假令ば不云不云不云●●と唱へ。たちつてとの物ゑてい。●●●●不云●と唱へ。なにぬねのの物ゑてい不云●不云不云●のなゑ〜唱ゑる事も亦天然の理ゑ〜ずや。

○和訓假名を解

先哲假名を法式を建てに。毋字罕字を省略して。端のい中のゐ。奥のひ〜ふけ。端のへ中のえ。奥のえ〜ふけ。又は〜わ。う〜ふを別て示せり。然るに傳武藏法師大成ゑ。毋字の中ゑいかをたに。ゑ同音ゑ。毋字をゑて事を破る。又古の物魏法師も已ゑ斯く同音の字を双ぐるゑを破せり。吾按ずるに。又十字い中梵字ゑそ。初の四つ中の四て。後の四てと別る。ゑ吉備ゑ片字ゑ易て。イ井。ラオ。エヱ〜吾揚ゑ別る。ゑ慶弘法大師片字ゑ準じ。艸書を省して手假字を制り。又いゐをたに。ゑ〜吾揚ゑ。ゑ〜れ〜ゑ事ゑ。ゑ〜ぎれい及切ゑ嘘んで混同雑乱ゑるゑ

方ヨ。假字と呉て世俗に四魏法師及び馬鳴氏ホレ紫い悪墨ホレ源理を究ぐるぐる方ふ。存ホレ同音ホレ字ヨ差異するこを知ざるべ。されば

あいうえを所属ホレいうえをい能生ホレ者ある方。ち者自然と直者ヨ

置き。又やゆえよれ切のいえ等はい訓生ホレ字ある方。変者ヨい

の者を具して　いえと置き。又わゐうゑをの切れゐうゑにい。う亦

生の字ある方。変者ヨ　う　ホレ者を具してうゐうゑをに置く。是　や　わの

二切はあいうえをれ第二と第三新生ホレ者なれば。ち者自然と拗者ヨ

置く。是を以て各ち別あるこを御覧じ。予意墨の摩多并又

を以て奇験合字物者をホレ秘変を粗伝授をしべども。密教の秘

伝なれば漫ヨ切ー難し。然ホレ毋字の字十表は反切表の所用まあ

ど。是一切ちこの假字遣を示をは。假字を一連ヨ列ねざれば。初心の徒

は迷ひ難し。故ヨ予假字を以て五十字を竪ヨ通じ。次第ヨ列

ねて假名を論じ各字の下ヨ同類の假字を集めて。幼学ヨ示

を者こ。

あ　ア　の同じ假字こ　墓後悦同抄云く。下ヨ出ざるいの。ヨ下を分ざるあ

ふ。愚按ずるに叶説ホレり。字い何れもせよ。あの者を下ヨ用ゆる例

ちんや。和字正濫抄云。あれの二者い下に附ざ。是ホレ説こ

い　イ　以同じ假字こ　悦同抄云ヨ云ひ下ヨ出ひは合ヨ出ね。又云。

自ら性ヨ云ば。何ものれ者。愚按ずるに。ヨ云いヨ云

ふ字のるこそ。石岩破のかさを云。下ヨ出ひこ。假楽韻類一昨日

などの類に合ずして絲竹の類なり。以呂波字考錄云、に
合ずして物類を云ん。中ごろ文字とに合ずして假名ばかり
を不越越ふるなどいふ類なり。山說如し。不越と云同い
不越と通ふ。初の不越を畧して。ふ越とし。いの假名を用ひ
る例なり。不見不云不知等も此類なり。いさくしの
通と云ふ。いさくしの通と云ふは。さくけと通ふ。下にて云ふ。
さくけと通ふは。きといの二つを用ひる故なり。
通ふ例。抱書裂燒法拂卷焚涌吟改引浮好妬援吹泡
沙忘汀玄溝砌退續の類。生傳同あかわ同の例。又ますせ
と通ふ例。志といの二つを通ふ。傳指足作塔溝減汀絶通賣

等。是。是昊同のさか相同の例。異同同の例。和字出典の類。又
く出せり。牡丹花考栢假名考の類。湯のいを考て讀む。又
ぬうの字も同じ者の假名なりしる。意い字者のい類の見。假名が
嬉治累代の始を云。又の類。湯のいを考て讀む。
けば下といとを讀むと云ふ。最も出せる。いさうくの通を云ふ。又ひとしい
の假名考を動もすれば誤る。假名は鯉鯛物類考のいを
いと誤る。世と考へ。考て下の出典の通ひぬ。いるひの別を能
く正すべき。和名抄考識編。和字正濫鈔等を能て考べし。
うの字同じ假字。悅身抄云。とよとうの下と云ふ。是は自ら性よろ
べ何くもこれ若しうべしと。扨うの字を休假名と用ひる。湯

縹なとゝぎすを縹縹とゝ体とする事和名の例也又徒然艸等よりも見えたり
又古今集の例也なゝに仕とゝきを仕とゝきるゝ又見てゝゝん例を見とゝ
唱ふるゝ。皆う の字を加へて体めるゝ。者栢の称よりの假名入声隙き
書とゝ上 いさくし と成る下ハう の字ぞし。意ハ入声のう 意ハう より飛ぞ
餘の字書とゝ異て引字よりハう を用るゝ。ふ より徧し称とゝ称く示せ歌し。

いさくしゝとゝ成る下のう とゝ云るハ。意き 色き 嬉き 怒き 苦き 楽き 畢き
情き 潔き 甚き なゝく毒ふ顔を。又潔 意ゝ う より て唱るを云。右
の内より嬉 怒 苦 楽 畢 情 潔 の下ハ みむめ びぶべ にも通ふ例し。
み の字の称を保見るゝ。又者栢の称より意の う ハ乃飛ゝ定れど。入声
の う ハ ふ の字なるゝ意ハ入声の内の邑名集贄入立等の末韻ハ う より

紛ゝとゝふゝ。又の称より生の字と う とゝ訓む時ハ茅生や洲茅生生後
どの類ゝとゝ。悪梅ゝとゝ。生の訓より生とゝ假名を用るハ誤し。生の假名
を用ゆゝさ事ゝ。悪今二首に詠更て云。生を生とゝ訓むハ土生土生 う より
雷とゝ。生ハ菖生や。浅茅生 の類。ゑ とゝ雷とゝ完生もゝ云れど。
生生の ふ で う よハ飛ゝな。ゝかよ本綱夕白雨の類も う より紛ふ唱。

ひふへ の毎。又 ふ の字の称を傾考ゝべし。

江 えゝ同ゝ假字ゝ。悅同拙云。よゝ出江下ゝ出へハ合ゝ云意ハ
ハ自ゝ性ゝよゝゝバ何ゝもゝゝれ苦ゝ。梅吉訓芸ゝ。一字假名
の字ハ奥の ゑ を用ゝるゝれゝど。江衣枝の三字ゝ中の ゑ を用ゆゝき
ゝ江ゝハ先指江衣を江ゝと指ゝて中のゝと飛ゝ来ゝり。又枝ハ

枝の下異にして枝面枝下枝椏枝などく㋕の假名を用る。又稜
緣牆墻等も㋕の濁名を用ゆ。遮蹈等も山類なれ㋕
の假名をいやゆえよの訓を生せるを考へべし。

を　を我ほど假字こ悅因拙云とは出れ下は出を是は身が
性よりうべ何もうれ苦しうべと。愚按ずるに。れは下は部く字
は飛ぶ。者稻の訓は猪の㋕は猪中の誤一字と下モ字ぞ小の字尾
の字は奥棹の類。又云猪中の誤の㋕は麦行掏音琴絃小字掏は
字と誤り。し初の訓は尾字を㋕の假名と書は可なん下句とは小の
字猪字に魚棹の訓と添て可なり。美玄假名を通はは何ある
女郎も押ゆる方推量女已自身撫〻各愚按ずるに自己の訓は奥の㋕
は假名とは已を書して

も已とも称すれば先ある説は岩伝達者音拙山
一説の者已已は已已の誤後に又能〻各も已ようの称るなり
綾猛毛猪蘆足緒小糸小多山小川小野小金山小塩山小忘袖小車
小子蚕小梯小笥の類忘れても奥の㋕はそいるべし。何れも猪の㋕
しとる。山部は㋕の假名を用ゆきい。氷奥鍬牧亜金通者作墨
ふの字は部の字は部の字は部の

よ結假名の字を被る下のといとゝ拙で時哉を後う。秘密を授くゝと
讀むこ。是哉高のつ韻と。その字をつをとゝ及せば即とゝ帰るこ。異同
のあた相同の例すて。右二例共(をこうこのほもよろれ)と通ずるこ。
意軍家ようゝ奴むの跳字を空點(跳の字を大文字とゝ)と名け。ふつくちきの入声
字を濁點と名く。結假名いゝ内よ生るこ。故て拙あるのるゝい跳字
結字の下なり。唐音の書清と云るも跳字結字の下の沙法なりと
ゆるじ。牡下の巷拙琴の紋を考へべきこ。

カ かうこの示同じ假字こ。(脫見拙云下よ出ざるかゝ下を分ざゝ
きうとゝ。是拙ざるに。和あよ分し詠る詞よ上るもの字なる時い形ゝ
て。引を濁りて。ゆゝく讀むべこ。又(カ)を助假字よ用ゝる詞こ。假令い

囂(ひろいぼ・ようぼ)笑の類是なり。

キ き紀史同じ假字こ

く ゝ多使ひ同じ假字こ。是拙ずるに。くとむよ拙ざる唱あり。拙く
を童くとゝ云ざゝと。拙んど童んどと唱る類こ。是英国のかま同の例
こ。又くとうよ拙ざるゝ。引して云ざゝと。引して唱る類こ。是嘆同
あか同の例こ。

ケ ゆ老々家同じ假字こ。(脫見拙云。上よ出ケ。上下分ぬゝ。又一
本よ。上下と分ぬきよ他をゝ。是拙ざるに。和あよ分りるゝれと詠
む詞。上よての字なる時い。きてぐり。きてぐれと詠むこ。
て讀むこ。

こ　コ　上に同じ　假字に。〔説文〕拙云。大方去て急なるさ　假名の
ゐ。上より去ざるこ。下より去ざるお。又上下を婦つどにとゝるもゐこと云り。

さ　サ　きに同じ　假字に。〔説文〕拙云。上より去ざるさ。下をとゞまるさ。
爲拙ぶるに。詩字の下にさをすせりの出ふゐる時は。上の字をつ顔の
中ゝざる麻より剔く。詩て唱ゐる。假令ば見掛さを。進發ーゐ別を通
達せん赤どの類に。和漢ともそれ灌での類これを働ふべし。是漢曲と
云ふ者に。又和哥の詞よ。いさ〻ゐる下の㋐の字を清と濁の別ある。人も
いさ〻も知ゝどなど孫ゝいふ。ゐのゐふて清て濁むに。又いざさ
ゐ。いざ今日ゐ。いざや子ゐるなど孫ゝるゐ。濁ふ濁ふて濁て濁むに別
ふよ率と云り。

し　シ　ゝに同じ　假字に。〔説文〕拙云。体字を也ゐ。ゝ云ふ㋐文字に。
假ハ時を喝や天月の雑長も。掘り。痛れば。ゝ爲つもとゐを。痛れ
ゐ下司ゝき假名ゐるにゝり。皆身ゐ。掘し。痛れば云体
めゐに。我と。人と。ゝ云ふゝ。ゝ哭ゝ。ゝ哭ゝのゝ文字に。假ゝ
字にゝを。又和文の綾よ。ゐりさ。候ひさ。ゐる云ゐを。㋐に通て。ゐし。
修ひ。と。ゐる顔ハ。吳用さか同の例に。㋐㋑同じ。ゐの字ゐる云通せ
ゐに。又和哥の出ふよ。ゐらしまゝ。ゝを清ゝ濁の別を。先らしと。濁ゝハ。
殺ぎれい衣子。ゝし三芳野の吉野山。孫を。ふ。ゝし。ゐ中の住む猴山
撰ゐる毛の。波ゐ衣袖匂ふ。ゝ。ゐ川よ。ふ。ゐ流る奥山の。ゐ濁の水で
今濁ゐ。ゝ。ゝ。ゐらしゐ。ゐの澄ゝそ。ゐん。ゐ出。袖を。ゐ匂ふ。ゐん。水

の今始るまでそんとの義同まで。下とらし。清て濁むこと。ようくすつぬふも
ゆるうの出ぶまで。下とらし。山る由なり。嘆くし。曝をし。吹でぬらし。
の類く。今世るにもらし。しらし。何らし。角らし。と云ふ義同じ。らしと濁
へ〜ずの通まで不の字の訓へ。不ぞ不除不量不暑不ぞの類く。
濁よまし。と濁る類へ。雷の類なり。せび濁ぬ山里いそ春を初まし。白
玉の何ぞとくの可ひし時。雪と養て濁るまし。拍を。傷のなど世ありせびぬ
ぬぐり人の云の聚蚊〜うまし。けらの類へ清て濁むこと。何。何
濁。何の何和戦爭何。就。哉。ハ。也。なぞ。ぞ。ぞの義同と重て。下と
まし〜と濁るものは。それども義同なるもの。野蘭で森
まし〜拍を小牧まで傾くこの月を見しいる世中に絶て樵のなりせへ

妻のへいせ宗うまし。の類く。まし〜と云出まへ一字。跳のんと重て。ぴ貼
解をまし。まし。皮をむこ三通ずる。絶れば爭春を初ん。雪と養て
濁るん拍を。人の云の聚蚊〜うん。野蘭で森ぬ拍を妻のへいせ宗うう
んと云ふ。濁る成りて施く。少ゆ。まし。と濁れるハ。也も不の字の訓と
て。不見不云不少不之不為不同不得のまし。扨Ⓛの濁。候名ハ㋒の濁
と紛ふ。多〜。先。寒こⓁの濁の大概を挙んまうてハ。（二士時而示慈乎自事兒字寺侍貴）
就柔京驚人仁任母甚尋儒壽受授聚樹如助汝叙徐順閏純淳旬殉看上讓常承来十入集實日肉熟
弱術辱多。和詩。そハ楠樅辻虹蛇雉羊朱糞錆質
鄭湯初善廓角業八十年交好恐不進不退多。彼ハ准
紛ぐし。

すを書く次同じ偏字に㋝の渇い㋠の渇に絡ふ者に先言ふ
吳音のそうして坊主数珠に手を当る。主珠手を当る中い濁音に和
語にそい数首駱駝函掬蚯蚓嵐猪仔上猫虎及掬京に言ふ沈
因炭名に。じずに属する称いかさまにして多くいちづの偏名を
なり。掬ずに趣て和語い言ひの渇れる希少。見の玉風な
らん。されば墨炭掬名もいつまでそハ渇てなし。仔上猫虎の類い住と
云ふ濁に憑に多くい多賃にて渇るとんぬべし。

せを当る夢同じ偏字に。和字に様痛せ〜ぶるとえぐさと様
痛〜てしか〜濁るこれ去て及せてせ〜かく成る。

ろッを抜不同じ偏字に悅目抄云。下に去ざる示上下をうどを去ぐ

きろと云。又或抄に下に去ろ上下をうどそ〜偏せろ。君按ずるに
㋝の字を和字の生ぶに用ひた濁渇の二ッ。下和の切に云ひぶ抜そ
ぶな濁てなぐ〜上にぶと云ひ下に㋝と云る類い生濁て渇むに見
濁文の禁止の様に。勿言勿視等の文に同じ。又抜と指と同じそ
しで仔で角で。仔ぞで角ぞで。仔のどで角のどで。角りで。仔のど角までの類い
渇て濁む。

たタと者に多同じ偏字に。悅目抄云。下に去ざるた上下をうどを去
べきそ〜に。一ッに上下をうどを去べきそ〜に。

ちチ ち同じ偏字に㋝の渇偏名のみ先言ふ。治地持仲級沈陳
尉女除仔丈場壌重蟄昵軸求著直。又吳言ふ濁世禪定灌頂

の類。又除目掃除年中饅頭の類なり。和訓にては氏族揖楫員味鍬齋菊園伯父祖父汝徽山路冥途標茅原紅葉流乳母弾戾搖葛豆搖櫛宗陽也巴戟繪経輪斜名伝人妻為恥用攀

緘室草結 緘治等

つッ川 清津同じ假字。脱目拙云下より出ざるつ上下と分を出く況川くるる。つの濁假名い者てい繪昌大豆三途頭陀僧都厨子神通等の昌者のこ和倍ってい水潟生屠徙洗堰弱按讓卞彼棒小豆孰伺処和泉生雲的山貧蔓葛城拉秀領春玉章四阿几浮湯等こ。叶餓繋ふるこ。高按ざるに。つを助假名よ利ひるい天祢下磐根荒比菅方の類色こ。餘い准知べし。又文

詞より以金最專天晴情等の。つと濁て以金最当る天晴情等と書く事い山等の詞を結るとさい者の結假名の様より別く必ずして好くぬ友。つの字を濁く事和文の法なり。扨又讀曲よひふへの通り

るれの通の詞を。つよ通りて。唱るするこ。ひふへの通ってて。賞へて。綯へて。辭へて。辭へて。食へて。逆へて。同へて。結へて。先へて。律へて。排へて。云へて。准へて。敬へて。の類い。ふ。つ。相通ずる入声同の例こ。尊真人も亦これよ同じ

又。渭へ。辭へ。食へ。拂へ。伴へ。の類い。ひ。つ。の通ってはた同三通の例と

云べき。欲りる礼の通って。取れて。同れて。至れて。偕れて。の類。又。去れて。歸れて。動れて。毒れて。

赤れて。など通ってい。見たら。吉凶。三通の例。欲る同例。又。豆。勝。待

などいちつての通ってて。下にてて。云る。出ずなくても。なよちつ相通ふ

称なりと知るべし。

てテ　てと音なる同じ假字に悅目抄云。上より書ぐるに上下をなぐさむ。ての字を助假名に用る例は仰んに見し部しの部に見仰んに部しと云べきを下の字にて解るに。

とト　と音同じ假字に悅目抄云上より書ぐると上下をなぐさむべきとなり。

なナ　なる音なれば同じ假字に悅目抄云下より書ぐるに上下をなぐさむべきなれと。又定家假名遣に巻末より下より書ぐるに上下をなぐさむべきなり。なの字を助假名に用る例を知るんに見るんなりなどの類なり。又古今集序に人丸なんどの歌の体を男女伝文抑の物衣をなんなどうるとなる歌いなんなどなる出ぬるに

て文を優に休めるに。

にニ　ふみより同じ假字に悅目抄云。上下をなぐさむべきにみに。又定家假名遣に書末より上より書ぐると上下をなぐさむにしるに。にの字を休む假名に用る例いるしに入しなどの類。又古今序に人丸歌すれども去き徒然抑に歌魄れど風すれど風すれど言べきを。にの字にて休めるに。又ぬ通ふ詞なる法生所如何所以哉写統中胡為等のんい。ぬの軽音にて跳る事なれば二三お通して。にと。ぬに拙ずるの例なり。

ぬヌ　ぬ　ぬ同じ假字に叛舌図して跳るんいぬの軽音と云ふ者なり。て。ぬの字と同じ事に重量部に用ゆる事

へ。む の字の訓をとりて訓ずし。又和字のもゆる字ぬと云ふ別字なれども此は撥ぜず。叔又ぬ〜つ は共に言偏の字にて生ずる相通ふ。假令ば咲ぬる。散ぬんと咲つる。撥つんと通り。言ひぬ咲さぬを言ひつ笑きつともいふと事。そ用まる ぬ は和なる字なれば撥ぜず使ふ。是たな用の例。又ぬの轉音を に と撥ずるのみ。たとへば物の名に頭まで衣を泳むと三衣と三衣〜泳〜菜を菜〜泳〜葉を葉〜泳〜ふ苑を苑〜泳むの類。これ跳音を引てハ音より泳雑さぐ辰。なにぬねのは音にて二三通ずるの例。又清る遜る見る拵る霖る添る綾る晴る なども通る跳假字も ぬ の轉音にてならば用の例。されば撥ぜず なども用ふはま用の訓に用ゐず〜訓ずし。

ぬ子 孫孫 ぬ 同じ假字。ぬ〜て も言偏用の音にて生ずるよりおなじふ。假令ば人〜を不見秋い事より人〜を不知能く弓もなし〜と云ふべきを不見不知〜通ずと類く。是も ぬ の音の方和なる故ふく使ふ。又掘ぬりでたぐ大方の音ぶふ。清れば清も秋の袂をなど泳〜ぬりでのでい不忘前の暑せるを不の字を干るでまあ〜ぐ。前のごとなれば ぬ よい通りぬ〜訓ずし。

の 乃 弛 は 出 法 同じ假字。の の字〜 か の字を通ずる事。かな同和又通の例〜ちぐさ狩。又の〜ゐ〜ふもぐ。和字の莖牛よ松出で呼〜〜ぐさを。松出の呼〜〜泳〜掘うる稼よ嘗の呼

くとゝろぐさを寄るぞ嗚くゝ涙てあるよお逸りをり・是ざな音用同の

例ゆて・㊤の同じ篭の字なれば・

和漢字名録巻之上 天部